

セッション3：企業の価値関連情報開示の充実と投資家との効果的対話

企業が発信する情報開示、特に統合報告書は年々充実してきているが、多様なステークホルダーとの関係でいかに情報要求に合った適切な開示を行うかについて苦慮している企業も多い。本セッションでは、企業側で情報開示の責任者である3名の方にお集まりいただき、2021年発行の統合報告書の内容と投資家の反応について、モデレーターがそれぞれインタビューする形でお話しを伺った。

パネリストとして登壇いただいたのは、株式会社日立製作所 サステナビリティ推進本部 主管 増田氏、オムロン株式会社 執行役員 グローバルインベスター&ブランドコミュニケーション本部長 兼 サステナビリティ推進担当 井垣氏、中外製薬株式会社 広報IR部長 笹井氏の3名である。

企業の価値関連情報開示については様々な機関（WICI も含まれる）がこれまで表彰制度を企画し優秀な企業を表彰してきた。そして常に上位に評価される企業がある。パネリストに参加いただいた三社はまさに常連である。

モデレーターの意図はそのような企業のどの点が優れているかを視聴者に認識していただくことを目的とした。具体的には特に近年話題を集めている ESG 説明会について焦点をあててモデレーターとして質問をさせていただいた。

動画配信された内容を視聴すれば各社、様々な工夫をされていることが分かる。むしろ心配なのは機関投資家サイドの受容能力（しっかりと意味内容を受け止めて投資意思決定に役立てる能力）ではないのかと思う。

ESG説明会での情報を咀嚼して将来の（長期）財務諸表をダイナミックに予想し投資価値の算定を行うアナリストはどれだけいるのかという懸念すらもった。私は三社ともそのための重要なヒントを与えてくれていると確信した。

大手機関投資家は今、ESGリサーチ人材を揃え始めている。それはそれで結構であるが、Eだけ、SだけGだけというフラグメントな分析を行うアナリストを揃えているだけでは投資価値の算定はできない。理想はファンダメンタルズ分析とESG事項をすべて有機的に合成評価できるアナリストが必要なのではと感じた。

ESG説明会をより充実させるにはアナリスト側のレベルアップが必要ではないかと感じた次第である。

三人のパネリストのお陰である。

三社とも本業におけるイノベーションを常に追求し、むしろそのためにこそガバナンスの充実・サステナビリティ経営の推進について留意してきた経営姿勢が実を結びつつある。同時に経営における「オートノミー」（自律性）を発揮してきた企業と考えられる。

（文責）北川 哲雄 氏：青山学院大学名誉教授、東京都立大学特任教授